



羣書類從

三百五

老の繅言
老のすはら

伊地知文庫
文庫20
358
5



文庫20
358
5

群書類従巻第三百五

伊地知氏書冊



捨技保己一集

連歌部三

老朽くりあを

心敬僧都

いあさふほさうより天不雲風さうく成侍を
後うつ季ゆく月日れ光成を日午さこの中ん
そくしてあふりの月くくあうゆとて
新くめく侍りしおはあま世れく終と成て
一とくふよられしひ侍る主上芝初玉産を
うしめ侍陸槐の棘路月御雲客成らうめ

うまはわらうきふよ隈に清舟をさくくあひわれ
 いかく舟をさくくさきとさくくにくらうくに成り
 さゆまは花の嵐よさやしられ枯草の赤葉の
 本よりしにあんらうあうし掃ふる孤露の葉れ一
 葉のうぐらうさたれしをゆりまにうつすれに
 あひくわらゆりけはうらうらにふりあゆん
 らあもあはれ富士の稲穂念の里浅も見ゆれ
 町あはれわらうられゆめゆきしと太神宮赤穂
 なとれんうけゆりあうあうさゆれは教
 浅うさゆん伊勢旅舟士の舟舟れあうらとたの

であらうとあささ茶湯湯るれ風波よあふいさあ
 花くれ煙霧あひむさひてあうらぬいその藤一
 舟の就るぬ崎の葉れ葉小志ほほしてうよぬの
 葉とさうさうし種よなうくむさうの泉川といへる海よ
 うらうゆり谷とらうとも見えゆきやそゆ法のう
 平とふ立しに世のなれえれいよくれゆめとこハ
 花葉のしそあの中あはれすもさうくあうられハ
 ひくすう便とさうあひきあの中あはれすもさうくあうられハ
 船浅むすひらぬあふに浪花枕をさくくう福
 の葉れ中にあふささしたまひんらりうあま

えあつたれえれくさるに成てをうひより年
 あくわあとのぬひすくされうう刀山銀樹の色
 くらかりとあひのうれくもまたくくとさるくか
 さいいふふかりいものもさゆ昔昔むしりも
 志らくれん哉の人もやと尋入竹の種りさるもの
 朽く大山の林赤き星霜年久しく昔の室あり
 かりふくともりともめにをうらり竹のくにんこ
 ころしもとあしと乾坤の糸れ増地まるといふ
 ををくあをたのく物仁者智ももんとさるめ
 竹のくさるや向ふに孤峰嶺くくしてやとさる松

秋あつひあらぬ斜陽哉うくふまのまき
 柿のりとして散てをれうく苦れ楚をかくけり
 孫峰ささうかに生めうう煙紫藤の緒うして昔
 有れくくひひのひかりと子猷采天の園主質を
 長く入く仙家えくやこにやまうれ花楽のうれく
 やのくえ新神れやまふをいやと斗や春堂昔にう
 産くぬまひもく破て新ふい志のふ小松ふれあ
 におひ鹿をたうく旅の嵐よるふれあめとあれ
 何人る春の巻ふつとらたの人か種れんうあうひき
 牙もく切り杖やほくほくいふくさる南のふ

ありしころにいと態をうらへりて
 されに陰婦り若れみらなむ
 門あけり小杉橋系花の末と
 むらしてしるすこほりて
 泉苔浅あらし流石なま
 層齒斜みしてまらりて
 ゆふよらと東地らうに晴て
 の花とあし朝の露れさ夕
 揚をたつおにいた散物落
 犯りし日のかりあもふ

蹊統の蟻地あらしかりて
 りとや獨孤たしとありそ
 菽畑浅うら里れ子木實
 むれ本あり弱をいむく
 笛れ夢のこがさのあり夕
 とあハ公流れ月夜待ら
 らい更をけし舞洞のさ
 碧色おの夢を破り感情
 庵山のねれぬと雪之洞
 んもめくこととそんえ

持戒和尚学宗の法忠花産祿のむ子法月也
 かどけつて了ん和音れ海の法忠玉成ひるる
 ありありあさうして織月のお香壇のりよの法
 法れつわくおい帯の藻浪の巻松のうき也宗也
 けつころかりとえさ満くいふよあつめこまわ
 りに尋ねんりありあかりなり契りれかともうら
 物さういふいあさうとも侍も尋ねんりま
 うらお侍り一の巻もあさう人よあ侍り法也
 さん巻ありさ苦れけりれくともひよ侍り
 侍り巻さ侍りれさの侍りいといさう侍り

姉さうれ果極もきんあらん懐とをさうい
 うさう侍り也

け道よしういさうさう侍り侍り侍りの侍
 かともありしと侍りしかと懸あさ法乃道極
 小いと法成えと侍りまう人仕侍りこり侍り
 侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
 侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
 又杖こをのうも侍りも侍り世成とわくせし
 かけさともれ侍り侍り侍り侍り侍り侍り
 侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

世俗の六藝は誠うららけひつちの南をとり
 すらか子傳しにけしひるまのうれおうれ出古の
 万里れ雲泥を濁して海をひ胡絨を場乃を
 懐よたらあきとそたら筆うあまのあしたうこ
 けへ種武の落種誠をうる款も層の一筆の
 けしひありにひくすう便をけしあひ傳らんを
 このあふりよ志うけうき層もれらあゆりやこ
 忌諱もし傳りあうらうれふといわきとの筆
 れとくひひありうむらあひすも傳れらたふ
 己種子をつりてあうらうけうけうらうらうら
 とけりゆららうらなる

とあうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 へふ術愧懺悔おあうらうらあむひてむ子のつ
 とけりゆららうらなる
 やまこころあみらの混沌うけしあうらうらうら
 照如し紫をけしけしうらうらあうらあうらあ
 教をうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 らあんの象うらうらうらうらうらうらうら
 おあ代はあうらうらうらうらうらうらうら
 のうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 ひあうらうらうらうらうらうらうらうらうら

さねう歌に風花をふとりにむしれし葉色を
 そろふことに後鳥羽院の代よりいりてすれ
 仙ととありむしれあひ深詞書のおくおる
 艶流泉のふとくつらけいりれ舞鳥こええ奥
 方とけくしゆりも也慕塵徒風してまおその
 方よあれろとなむとあそこの末れこりい
 又ふ乃意しひとくれふと葉乃病あふこもく
 いりあふそちうこせよのちすうとれゆりわ
 無瘡毒喜のこころりあふこに是ゆり可れ
 乃とそりしうこせよのちすうとれゆりわ

えてろふれ二条右衛門道中巻におりて皮
 沸流より盛ふとくあそひゆりあひゆり
 好士救済覚悟昭良のふとてててててて
 あえゆり皮おの仲あつ法海ハ平や折敷を
 救済もろりしゆりわあそひゆりわあそひ
 らうにゆりしゆりわあそひゆりわあそひ
 とくしてふえゆりあそひゆりわあそひ
 孔素はつこにまふひやほふにりてふあれ、風
 神にるれろもわされいんちりわあそひ
 何らくそるのこにゆりゆりわあそひ

夏れ樂の竟舞もたまにるをいへ方とともるをれ
 傳りよ未つゝ一梵灯店主りり好士亦く世
 こそともやし傳りに四十れとらり澄沏の身あり
 て心よ小はれをすそはけりゆのとしてありまればに
 法をくく傳りゆサに傳にも及傳りやまほ
 六十ありりにして初より傳りゆとらみの花を香
 志不との象ありの濁まわ風俣をくくくお
 句こそむすそ思き傳りゆとあり年久の瘠く
 伝ありゆり傳りゆもふとらりありはやまはら
 い来む六十傳り傳りゆいりよあり句のんれありゆ幽

まをるのれとらうせゆるふやあゆく付ゆこと
 ありよおのすはつを又一句とてはかたにたふて
 ふと葉斗とつありやのれとふとふとつとて
 けりとも也けりありけりゆりていれり定句も
 主妙の物よありいともりの秀きとてま下れこと
 なるといへりあり句と我句とのるふ句の寄持作と
 の粉骨にありられゆへとて大方一句れよ小とら
 りゆふありゆとるゆの傳麗感情ありとていへり
 兼句れつらひふとらありんふ乃免恨大切の
 たりありとらり傳麗感情免れはれありありとて

後者持いあらしむ徳有りちる比おれんをもうとひ
さういふ好士ひらのやうお來しうう又おりの所は
ふふあひあひに成有り

上右中比の好士いつ世も弁れ道よろしくえん
徳ありやむ世のふふまゝい徳輝をさぶこはとれ
すういふいよおれおのさふよあうひ有り世がこと
うい吾等の所よりうとけり好士世よこちしてん徳
ひさうしてつあこよのさふあうれうかりくえんよ
まふん好士れんよの徳有りもあらしうくふいとい
徳ありおとあふて徳はひあひいりううれ徳者

とつしてをききけくくわあううをあれううとひ
徳ありあひいふいおとあふさるる人の徳はあひ
あひさうのあふくく徳はあひさうに徳はあひけり
あひて救済一人の徳をさふうくやまねえ用徳
の徳さあひいにあふくくいさういさうの好士をの
風神さういやむいさあひいあひいやあひ万徳集の
ふあひらあひいさあひいさあひいさあひいさあひ
ら事のとあひいさあひいさあひいさあひいさあひ
世に右賢と存て未耳目のりしていさあひいさあひ
いさあひいさあひいさあひいさあひいさあひいさあひ

乃の女是み行くひろきるあつされもあつと
 名前えんあつあつ葉さこもあておほくゆきと
 古今集のよけ道れ鏡あつとそれと人善千の
 控ゆるく式定あつと云祈恒費とく奇とよに
 侍連ともまきけしあひえとるあといふまよ
 孫つう又公任ののりとも母子名残思とつういよ
 めりうとんとほと手孫つと堀川御のこられあ人と
 も祓りまといよりこせゆるけめあといはふつとあ
 えんゆとあつ皮つゝの眼あもふもと是へゆりま
 後風神さゆくまつうとあれに何あに幸世のあ

用ふあつうらあつとてああふとよあつと
 小野屋風依理つとよあゆ法いあつ説のりよゆ
 らもけらあつとほつと小字へさといあつとらつとあつと
 たああを遊殿れは代あてあつとあつとあつとあつと
 丸前伝えをけつといまそらけつと久を永効まし
 の屋ああをつとつとゆりまあつとゆりまけつとれれ
 お世れあつとあつと

御製 後系格振政 慈法和尚 俊成卿
 定家 家隆 西行法師 持蓮法師
 らつと清養和當れ風骨と唐細お入あつと

けりのを理めんとてけけおのふとくけりて
 入面教しててひけけたくも味ゆるし也かよ
 け風骨もよよの救済一人の風骨のふいこの
 尋ねんとふあよや初学れはくあくの好士は
 作にもふとけゆるしと也教の法眼をかとうら
 しくとてく大切ある式さうひよ入らそくハ
 まひらそくやあふんしと也ゆるしをけゆる
 けけけり大切のり定敵の中ゆるしと也かよ
 外に教ひあけゆるしに我作あふらあふら
 又ゆるしとむほらゆるしもあふらよはけ人の

云々うらけ文珠乃智富梅那の毎あても多
 一 字利根のともしりてやすあふらよあは
 とくへいさく世俗の能藝作りに推れさうん
 常日教さうりけとゆるしむきけうらのふ
 ろとかならるる式あ教あとあふらよあ
 のと大切れ好士あふらよ西けと人とりけ
 聖に就てあゆるしの上手例の人九れと也
 と勅定あふらよもたとへと世俗の凡情と
 むきけうらとゆるしあふらよけ道ハ先
 あひゆるしとたけあふらよとあふらよと

小名をえらる作ふ大切のゆありくをしえ大
 快の果の毎出あつて又我をらしの存を
 小常のしりしとをさく前かともねと
 てものと種類とも合ふといはるまて存紙盡
 高後人の階級いふはゆりて世にせよ名
 とをさる好本もよまていふあひて人の文智とも
 紙のつれ古れはとも合く後かあを故へ
 ひり為愚つとも世つと前人の新陳ゆよ為愚
 つ中ゆひとめん我もあく一万余を仕ゆら為
 其の六百そよいさへいすそわしてはゆて其の

方誠を存かゆり舞浄無法師と世万そたか
 誦ゆりていふとていふとて也者よも撰るか
 身あていふてゆりことなりくけりたに北面
 白りんあか別の枕言語りあふくは
 切をほとんこと業とていふゆりては根本のて
 のめふ人ては替古斗まはしてはる屋より
 あはに

清宗和尚云我は為書口了後の末業よゆり
 とも弁いた定家慈法のみゆりてと直ゆり
 うらやとゆりていふとていふとて二条冷泉とて

志すいゆるほをきいぐる病一疎よ向上直法
かるべ

復業いころるれ意用の人生活ゆるさるるぬ
先達よお見えへさうまあふさうへらもうけゆるい
利性乃人をもその志を培へくべ

いつても治癒いぬゆれトよ今日松庭訓と並
てさうあまよりかさひをりふ建部士ハ我ハ院治
のともしをらこころをよま為ゆるはありまに
らんゆるさるれハ教ハ誤のとはかくゆるさ
いさうさ世よハ言れたはさかすすれゆるハ

さあてけりたまこころもあかいあさめしう
れお戒乃端をもたうまらた多しとれ公をも
やららあまのともさかきさもあらとゆるれ
へよにちくハ教ハと日を辛ホ乃乃ハ成以
ていれるあやしれ志つわ民の市々をさるも干
る方句と身に見てらあむさゆ也一産をも
一樹半樹よもそゆることにあむさゆるさけた
の懐切末は乃時かむ式ハ法是れ乃もさる世人
かさけあさくさうゆよあむじゆるさ也
おに志るる病ハ病とす付又さるあくもの

あそふくはといふ句もあ

目ら法則をこれ名句とていふ句もあ

葉のこかき枝をうく秋風と云句に

と想といふあめぬ人あ月よきて 同阿

葉の句はれうくしてゆくといふこととて

ふらうへいより先人うくゆ

うくいをぬひあのをれほくよ

知れらうくさいのこけあ枝いあ 同

當に青梅郭公に知れとていふに

らなをれんうくうくいへう青梅をうく

あそふくはといふ句もあ

ひひうぬれうくゆ中へ

富士見とて浪乃とつゆ沖舟 梵打

中をい富士のこめと句れんをうくいふ小あ

句にわくきゆとてうく

ゆらうに乃ら日とていふあ

うぬらあまも初世れおそ梅 同

葉句目とていふあそとのふらうす武又とて

葉梅とんをえはとていふれゆとていふ

もけ風神とていふあを一句とていふらあ

おろくに一字も詠吟お連とほいそら来よそは
くつと陰もし書らるおろくにこせ人かあうゆる
すのうはひ

中津川の先達はゆるけり句の合れ句けり
心符の句おし書り合の句けり人にんのおゆる
さそらうらうらぬ極子えくありれ垂くさよゆ也
ん付おぬ句ありくは言ふ親句誅句年とい
へらいつまもん付れ上ありれ上下らうう造らぬ
色をいといへら事ありううは又申古の付合と
したく意しう付らさぬとさうあをたておろくに

とくみ海流りあきたる危命くゆる半れ句のそあられ

花とつらにえ 橋橋 お紫にの 藤 河 田

鳥よの 古の 田 橋うらむらう 藤と

老に青いあへせよあを控り 嘆よ

福さあうらう 入るの 藤

うやうにたむしゆるあうこととおろくのんれ難儀と
まれしやゆる程よ満産同んあう句と自他
さる名のそくゆるれあれあ心のほらあうれ縁
とも大切なりあうやうらあう入るそくあうのんれ
さあうといらあをゆる程よあうはあう事と

まゝよりいふに代いゝらうと懐能いとおあふ
とあり合ゆらいかいれく式浦産をあらぬ場
とありらうる能名粉骨あらん
古人も奇なり

う魚と付田と又くはなる

あつたのり子肝松の根をよして 若何

こやまのみらとをいふもあけ

ぬれ目いより新ぬれもすあそく 救済

むゆらふれ行くにふよる

世成捨る人のあれよいとあてて 同

こらふおきい事あひりう孫

捨く世のらあといれたしむる森 良何

をけれとくさげくふまにきり

いやーれもふあふあらんをらりて 唯覚

うらたよとてけき藤球もまけ

かきとあれまきうたうあさ藤あし 良何

むふおららぶと人さうかき

とも川のらーにあれらもて舟 救済

同本分ともけおの繕さる上卜のさういして

修りかへて

世中誠ありあつて約ありあつてあつたあつた白浪
 杜若の下葉うらうらとるや獨あつたあつたあつた
 種波えわ若の葉あつたあつたあつたあつたあつた
 まゝもろろあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 まゝあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 けねのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 大いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 秀逸いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 こゝろあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ぼろへりけおの古人の他志れあつたあつたあつたあつた
 せうて感情あつたあつたあつたあつたあつたあつた
 大いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 やつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 他人の函を秀逸れあつたあつたあつたあつたあつた
 當産れあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 小及いあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

苗初猪宅院故小野宮に清系院耐をあつたあつた
 宗めいあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 小てあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

桃が古れ河を果てて流も時くは奥の一点か
らも色よろしくさよわさう舟あはていつとも
のさやふおとに暮ぬく流さきものさしを
あつとら行要あつととやびう物事を
馬りやうに用つとも尋得よさめこと二冊
すりともかきと麻言は担あつとゆりくり
中へ入らしたくうともとあら庵で

充れすさみ

宗祇

予既老の波むそらにうて耳志さふとらもあ
りうふむれ春月の枯ととらう胡の暮夕の風流
中らうひてすさみよやう露のつらとととと
いよ幾種ゆん空くあふれつとあと思つとて
けをれ道の秋流とむらとらうとんこれきとあやう
てのうけれ川のうや世中とあひんく鴨のりあ
さうとつらう一冊とあつと昔今のこのもはあ
つとらこれ備あつとこのまれあつとああつと
て充のすさきとあつと

允連親の由緒をうけてうけて世に好むものあり
 らひとのありこころを道にあらはれ
 去るにあらはれ人の心とすれはこれにあり
 時にあらはれしとあらはれしにあり
 思ひ入るの情はあらはれしとあり
 うよとあらはれしとあり
 深くもれゆる心ありとあり
 つつと後普光園院殿良基のいせよ救済とあり
 のゆりそれあん上をれゆるこころあり
 由とに月のけいありあり

様さけよ思ふくれの情あり

是は様の月をどうとあり思ひくらわれを
 つつとこころにありぬをけおれ異風あり
 小侍の由緒ありとあり
 いひありとあり
 そととあり
 たるらあり
 ばらんとあり
 の新あり
 と一句更よえ

んのおよよのよと逢ふか

月のあつらうれ川乃うらひ舟

けりハ誰もんぬるといゆる定家つの方も久方れ中
あつらひのうらひ船いうよらうらうてやと改やうんこ
ま心く久方れ中あつらひ桂ハ月中にあらおあれ
桂川にいんまこけ船は暫く久方れ中よおひらる里
かれいとよと改やう中におひらる生の字也

我う改やうかられそあそ

わう人乃入野の雑おねと鳴く

我う改やうと云たるにゆるむ作たれ妻おす人ことと

ろいあうらうあれへ付る心ハ持人の入野お鳥の
くれああうらう改やうをりておあうすい志うれ
おあもあうらう改やうあう改やう人おあうらう改
我んも改やう改やうあう改やう改やう改やう改
人のおおあし

はとのむらひいさもあふあれ

月のころわうらうの雪れ胡あけ

これいとまうらうらうの胡のふも真とつらう
あれうらうらうのむらひも忘れぬへうれ又我持人
にあうて付らうらう

うさせれ夏のよりほも式

かられよ今をとりてはすられ風

け松の風は只約はうりこそ用よと入れ風のふくと
いふありこそ心はゆかりおし世中ははといひて山
浜と徳とよの残生のまうとつりつとおめは松
風のあられある曉りまるとよま志あるさぬたかみ
あやわあおふらおいう思ひとらぬらるるさもうさ
その着あはれまんとおけこ心こそ是隠者の用心

月と山とあひまふらん人

野寺の子れと山と妹の如

先い野寺傍僧持帯月と云約の詞とらうて付約の
あり約の心よお遠せらうとあぬと云詞とらわら
字ありはすそこそは約とらわら心はらるるあり
野寺のうもの物さひいさ秋の暮月ハ冷くささふ
けたらんこちとあひいさぬらんもくさらん糸糸
くわ約話ともよき心はたれり事もあり又詞はうり
らうて縁ありて心を別み付のともゆらし新あや
新をとらそのおかこ心なる人ー又此詞の句よ

花と月と霞いくかともうんせ

胡蝶のうささかの露れぬるのよ

的ののよとこ中なる不連新のあらうとすもさき新よ
 とあれいといへるは但多し此らありのたらし秋風よ
 夕暮にちのめあつよ心里にかと申古れ人のこの
 外にあしとす多し尚時いさ句のさあまうとす
 かへは嫌ふはゆめとこそ付やういあひありあ
 しく秘さんこそおさう思入るころ所を仍是と
 うさういせり

旅人となりしはほも人すこし

萩の風よなうらたふりあり

うらたふりあつたふりあつたは誰のころ人さうとす

もみゆめとあつたあつたに恨人あるはゆめあり
 萩の風よなうらたふりあつたは誰のころ人さうとす
 ちりあれおも又文のうら

素もよと志けけり法とくこふと

け付やうの春のう遠のきとけり事とらうらあつた
 分てと付ゆりあつた合はうらあつた心あつたけり
 代尚時付くは世人のけりよみおつたおこ中らて
 かと付へし一句も子細ありや又武士も心よお人初
 新をよゆめ一句はうらとすことあつたけり付ゆ
 うさうあ

志りこそ人あしりれくや姫

何人の市路かやれ川

け付やうくや姫あ人の市にいらあうとさあ竹姫を
市女あかゆんあういうくや先とあ時あふ月れ
かろりよううら枯穂をさあ志るくゆん一うら枯穂
あうらう来て月の中よあうらあうあにうら時
ハ竹姫もこハ月宮れ天人あう志りト思あうら
て採竹れあさかあやうかられうともはあよハ八月
十女初月ああう一車ああうゆん

かここ人そきこいつる

近江の豊田の浦お釣あれて

賢人お釣を付らハ左公あかとのゆいけ付やハ志あ
あふこと付らう源氏物語よを江の君をてあやれ姫
ああうらうこれ句をうあハ左公あハ豊田の浦あすこ
近江の君を云女あつ人あうあて社ゆれハ外はこ
あやゆんばあ句ハあうらうすもかあ付
にハゆん但梅廻かこいハゆんハ比つ
まつハあうあせあてぬ身をいうもんをさあゆ
らん是自然の事あうかあうのさあゆさ付ゆれら
中古あハ思あうにゆれも初心れ人ああああ

書並事なれハ時代のすくハ中ゆらハうりこされハ基
 後悦目ハ雲沛州京極黄門抄もも銘の心詞ハ為
 此は之のともいひかけて可あうさうゆら心詞ハか
 ばと心心をなともよとゆらもや連歌の付やおな
 しく人しおより付し一句れさ由さるへきを至極
 とやへしあ一句ハよりくともあよつさうんハいし
 つうことあへし是別心をなとす人この儀あり但二あ
 たりあうんハ先達の句れよりしさをみて言ふ
 誠とひあさあハをのつうさあつさゆらぬへし
 尚且れ好士の句も其中に

うらみおのそら夜ともか

志おめのあしたの心おうすらすと 家初

けあ句ハそのとりりすもはしと付ゆんことた事ハ
 けうすあといへらと先うらことさあてひあうん
 うらあううすあといひりうりまてハ條情付ゆ
 志おめの朝といひあうしまもこのあうゆなれ
 心おそれあうぬこおはあうううとさあしあの
 ちあひさしたるさあ衣ともあといへらよ能叶ゆ
 裁服つこあそさしは

誰程し本末ハ野人あうとじん 心敬

おく心すも春そあはれ

鳥れりく胡戸あくれ花咲て 賢盛

是ハ別よきく何ハす人ニ事もゆるに但らるれ
新く物左あくれ云詞よおく心すとのさあよき
付物かしかやうあふばえり事みられ奉えり
へいあけあをばあ人かこ思あは備こそ
ここれぬかよあはれもか

花は風つらにいさうの物うさるん 同

是ハつらくもし風も世はも恨あうりおおも
花はらうさるれんここれぬ程ハ風をここれぬ

ほとあはれ

いふつひてうららうさるん

こもぬをもしはれはまう花らうて 専頂

これハ我身ハ里おほてつらとあへんもえうと
あひあ花こそあれはあへんここれぬ程ハ風をここれぬ
人誰も早れさぬかに花うららうてまのさひしに
時我心のとさう花あひえてはあはれのとさ人
成忘れすこぬ人さうむるあも竹へさこ我忘ぬ
れハららあはれんここれぬ程ハ風をここれぬ
あひあも別く人らあはれ

夕ぐれあしーさうらちる心 心敬

別し人といぢりゆりゆりし人こそれいふふももゆ
らうと云ふこいんとおれいぢりちりいさう山里れ
夕ぐれのさひーさうらちるまけさハ我心う人と素
すう儀あり

おれりし人も愛れを中

心さうらちるのちをさとひくうこと 能何

きの中とさうらちるありし花の初来あり教
らさうらちるさ本来れち葉斗とうら詠めあころ
時とあふるれさうらちるし人も愛の世中を認しう

ふせふあまも心よちも祠つひたのこまあ
すやうの句とまよ味すん

せれぬえと誰うさうん

備いさうらちる夜の巢山は目あうけて専順

たのむらうとを拵さてむまあり

らうらちるの巢山のこらう又みけて 能何

は二句とくえ念の利根ありうらうやうれこと
又大切事くらハゆし

春浅うんとい日くはかりあり

くれぬへさは生のこらうらちるて 行助

おれ春は久しと云ふをやることあり付心のいと云ふ
も人返す心とこれもうらうらと一舟の風骨

うらうらと云ふことあり

かたさしと胡の音ねの心越して 心敬

新らうはねのうらと云ふことあり心は音ねの
今胡も新らうはねのうらと云ふことあり
これも元合はなすことあり古今のうらと云ふこと
くれは新らうはねのうらと云ふことあり
うらと云ふことあり

えくれのあらはれをみることあり

おれかくて人の遠くはり付て 同

おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て

えくれのあらはれをみることあり

おれかくて人の遠くはり付て 專順

おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て
おれかくて人の遠くはり付て

宇治のまろれ心の瑞の月

暁のまろれ心より變りて

同

宇治のまろれ心の事と居らうよ
うとおのふ人ゆへく式源氏物語よけ世と
いひまろれ心かともあり但しを宇治よけあり
あゝ人のおのふおとすゆへにおふを又
もゆへありさすまろれ心より大事にゆへに
合はるたことよあひまろれ心してすこと
ゆへにさあひらきかきもあひまろれ心
おふよけり事連れの一大事

いづれもれとおふの月

よそのことおふいじこむ

智恵

付やうに別れ心ゆへにすことつねの
らかろて後人のすゝ家なるもあ
れよあゆんあゆみ道よ心
ゆへにまろれ心あそん
さやのたろれ心あそん

家もれよこころん結の心

おさじにやふ風雲よめり

心敬

是におふの誰よめりこころんあそんの言語道断

れ上を付しすし句のさ事も除きよきて付やう又按
群こやうのちれさひりけくまへいさあすら
まのこ作者ニ更すんくこ也

近きそのおより本はくは

郭公をも神とよ月いと

專唱

け句およるんいさくこらこえんよ付ゆきも
神とよと云詞月よ映するよりしてま理面白さこ
月かへいことりうあうさへし

うふらこ回れ正月毎のころ

一ひのころ丹のおふら花らうて

賢盛

是もはこえとこし中らうてそのおしれありと
志いてころこけ一句おとあうれさぬみちやう
てまぬれ粉骨とみゆりこ

野ここのおれくれそさひりこ

招ともすこころえい誰うこそ

宗徳

けお句考の着大事とおりのあしよいあさ
難句とさうそぬい何事とつけてもお細き付ゆき
あひぬ下もいやと思ひ上もいたのこすこやんこ
み尺ニすれのよ向し難射よけたなる的をいそ
からわさんと思ふんいうらまて夫とらぬあよりけ

け付やうの枯舟のいろよと云いあへばぬのやう
にらりゆたうし遠くこれあもあへ平くとき
らよあへの花ゆらちるあんな誠の枯のさあよ
うらみお似されいあへ付ゆかこ齒時の上はれ作
さ見まてんゆへし

夕れ面の舟はういよと

いは乃ちよあられちる船の深めん 賢盛

新ちよ異竹よ夕れ面のあふあふはくもあへ
船あけては面あられよあへ竹のくよ何れくと
波とすうとあて夕の面とおのいあられ竹とうら

夕れ面とおとらうといつたまは船もあけ夕れあへ
思ふ心お念や一ゆへ

松本とらふいあまこよあへ

らにこらとやくまへこれ里 行助

け里ハ松はも炭ももあたらあへあへよつらあ
けのこと業みちやうし一ゆれさあ面の眺あまてんあ
ゆらあり

あられもあへ本あり焼夕あへ

岸うら市の人かあ屋海 心敬

あさゆらうとてやういしあへ炭をい市にのい

け付やういむま心ゆるううこ世へんうううううう
 きんげやういむま心ゆるううこ世へんうううう
 あは花い年いふれうううううううううううう
 心いううううううううううううううううう
 羨もまれううううううううううううううう
 たりあはれもよさあやうううううううううう
 枕もこいこいこいこいこいこいこいこいこい
 ひかり古今よおの人ももれわうううううう
 らうわうもこいこいこいこいこいこいこいこい
 うううううううううううううううううう

せりていふをれうううううう

つれあふこのいのいののらあううう

け二句れううもせりていこ文文字とおいこい
 眼の付おここれげあうおのこいこい
 正理よあこ事あううううううう

二みられうううもあううううう

心敬

おくこの松のうううううううう

家初

是よそりうの切あうこいみゆるううこ松のう
 すくこい合する事し若とううううのこい
 もあうあうめらうううううううううう

かゝる季の句におろそけさまうくゆれは風情もあ
はらしてさるふかきも中くやうあうこありありそ
れも事たぐひゆんいららおろそけさこ意遠懐懐旧
かとの句にいふもしていとやそらうと思ひよこす人
て衆とていさよわ

むしれ夏のおもれもこし

あゝたよいそらあらしの寝ます

宗 砌

先ハ巫乙の神女あまをてねおのそとあり夕あそ
るともありこしひしむとこいま寝ぬまらあしあし
よそあのかうもあまあしこけの神女のあれ向影

こいさうしこえんし誰もあつともゆれもねおのあ
こえん文字いなりあ文字さうくかひはされこは古事伝
おろそけあすあそあれ句あそあしへし神道
ハ只詞をつさるり肝心ありゆけのいさうそらゆれと
去行ゆりゆり

たしよちさうげむすふもあ

里れ名もあそぬ野中の村あつ

同

これはくろあふおんゆりこえんも作者のんそ幸
芳きるる句こみゆりこい謂いすれ我あつこさう
あふこけさうりあそあふゆりたしこけさうりあ

ともあはれのつきのよれ思ふかきものもさうあつらん
 れあつてもやあらんといふしよすもゆへにこれらら
 かりきつての中にもなきまゝぬ里の娘をあれいつ
 してとあひひして誰あらさうとすよ裁方ととお
 ちふんここれ改おろくにいんかすといひもゆへんれ
 ころこしてゆかこれい同お句おかり付句おろこも上
 手れ作意と下手れ作意とい天地のちろひゆかんと
 くらしくよものやまくとまろろ句よき宝おかんろく
 詠歌一件もいころそまゝ詠おろろくはとゆかまわ
 ぬくをぞよまろく風大やうろそ

藤子れ愛にやすくとん巻の
 同

心ろろ神の枕かゝる愛の中よいたまよ愛こころ
 をねておとよよ荒野のいろくこ風よ吹おとろ
 かつれあつ端的にまきておろこおろひは荒野お
 吹風のやうこころとらろくこころらまこめろろお
 さらに平ののらおよあつはつらこのおやすれ
 句あれも入水の妙あつらり孫をにまろろ

さあやすと愛れ向新中りくに
 専順

中くはらぬわしことうけらお孫をあつらう

又主理ありて上をこれ物とみて侍り古部より
あつまられさやの中にあつていご云詞もお念して控向
白く侍りし

かかやらひの愛もたよみと

旅ハ秋古里いよまわれぬん

宗初

お向もさうして更おほくは事をも侍りて
侍りてやうに侍侍りし大いこの旅もかかやらひに
志も姑の志もさうあり然らつてかかやらひの
いよまわれぬんごおのよま愛ぶいよまみさん事
うかやも恋うも侍りて

おのよもさうして侍りて

旅まうと事と法とふへそ来く

能阿

おのよも遠くご云詞又侍りておし志も法法をさ
兼法法ひつて親法も子しおくうらひりさぬあし
れ保ごまわけ二句のあしおまうらういごさうりなれ
と子細か海きれ旅子よ成も船もいとすして
浪枕ハ娘事し神おはらうと侍り

右刀さげしうして休む旅人

ゆりごとれ愛や法りのま一孫あり

専横

是ハ侍りておのよもすていばれもすていごさうり

くめて志もつむれ詞つひ及へさおみあはは

比あやしくひらりの御と身お知りて

移手くあしき冬れ心ごと

心敬

およらる心はくんぬられゆるへし池こ云残心望
こ付てあひしらするぬの精骨し定家口語り
もゆるあや但作志ハ語多くとも付ゆるへしんせ
いづらおみられハ也

手残あしすうはうかおひて

左者よりつらこころれあうそひり

豊盛

けおるおしつかさあうらふあこみれハ又の及後れ

心もあつあまの難句し相撲ハむあり但うらおひて
たよあつたおと付ゆるあやうらあおもてハたか
らへしここころつらひこ禁中よて七月相撲の付
らかり徳國よりきたり物したおみよりらてころひんか
りひしこ花とそ夕顔のらな残髪あうてとら
ことあや

袖さへぬらみらしらの露

いしへれ宮の内神のころげを

宗初

内野よは芝生はあり内神ハ若れ大門の旧記あり
さうもれ宮林の記そのからうもなぐられ芝生

ねと志けりたるをんまるとに袖もうらみかへさこ
こりりし事ほこよみの世は毎ふ時毎度小これ句
あわれおゆふ今婦とおりひおて書かへゆし

山ヶけ免らる答茂れ川あり

かささしれけ橋りこの木おありて

智益

鶴よ木茂めらるこ云事ありかもよ六橋もこいらも
らうて社二あり思りてとて業平橋もこて宮方
かりみらうこれさつりよゆり社し付やうはけらも
これ木よ鳥のおり井かこして山ヶけ茂めらるさ
尚社のありはくはあひゆりし

じまの屋のおこそ髪しうらななり

春妹ハかとかささ若れ一穂ありて

専順

是ハ驛長句驚時變改一葉一落是春秋といん
るゆげとれるかこさうらうらといへらに若れ一穂と
付ゆりしこれゆハ亭廂の清作ゆれハ一穂白髪
れんもるまかこさ便ゆりや

我身よ似らる若れあはれさ

危みくぬらる若れあはれさ

心敬

お句の若ハ他人の若し付らふの我身よ似らるとい
んれりかり若れあはれさ

もあつらふみぢかこふわれんいさくらぬおわれと
色もれもむいてぬきハ月のこらへあそらうりに
付かせり

山崎もんよあつらふみぢか

おのへいこうさふいそむん

行助

心ハ山れけけけえん控ぼくおのへいこうりに
いさくらあつらふみぢかおのへいこうりに
しすもんこ控こころけけえんこ思ハいこうさふい
もんよあつらふみぢか又さふい

みねこころせよ本家からん

はなれをらうり何ころえま

専順

山後かこむ人のこまよの系ハこれすやうい
かゆらおといふ事あはれいそれよハ我あよこた
へんこえんこ山里ハ表張ハ我ハ風と本家
けらうりこえんわいあつらふみぢか
らあつらふみぢか
いおもてよやすあつらふみぢか
あつらふみぢか
人とりいさむんこらふ

えんけいあつらふみぢか

心よいたゞる衆も信つる

おのひあゝれ衆かくの月 純何

け二句いづれも源氏の物語を付ゆかにおはる源氏
すまのうはらひの時お境をみくつてばうささ
もかれつへとおほとらけゆへおぬふううかとか
くおへうつおひし事と親のいさめれ誠をまるとい
ゆよおのひふれかし是は源氏おとといつあつへ
次の句いづれも入道の世にたてたてたる衆よこと
りし事つらうう付れとその上さううにそ我
身の上も付ゆかひ心いづれも衆の衆と

かうなうんれいさうあふは世にたてたてたる衆よこと
あゝる衆も信つて付るは先の句にやう
らういふとれおまうて付るは源氏の物語をか
やうにうたうのいづれも衆の衆と源氏をまてやう
らういづれも衆の衆と源氏をまてやう

もあつてそれからおくれすこと

あゝいづれも衆の衆と源氏をまてやう 賢盛

是はすこし衆の形とやう事ゆかすはたうううて
付るは一向い仙業と鶴犬のありしやうおれり事
いふに付る心いづれも衆の衆と源氏をまてやう

きあうれと登こいへりあり

それうすくれあうれと新人

玉のこのあられうへりめとて

同

こいハ踏新ハ踏新ハ正月十日十六日十日ハ男踏
新十六日ハ女踏新ハこいハ男踏新ハ踏新ハ
ハ昔春ハ正月ありありハ京城ハ抱子うへり
ハ興浅つててうへりハ浅ありありハ
禁中院宮とて殿とハ新舞と登り侍りあり
ハこいハ踏新とてハ新舞とてハこいハ
ハこいハ踏新とてハ新舞とてハこいハ

みらうれと登こいへりあり

それうすくれあうれと新人

同

ふいたわ物語ハ新舞と御階のりこいに
法こいハこいハこいハこいハこいハ
くもりこいハこいハこいハこいハ
るかり一うハこいハこいハこいハ
えあけハこいハこいハこいハこいハ
長守ハこいハこいハこいハこいハ
宵ハこいハこいハこいハこいハ
尤粉身ハこいハこいハこいハこいハ

小付ても付らぬ心のすらしめ肝心は次は作
老の句は門は心はぬふへこすこ銭をおのく人
但人はおの好はよりへれ他の為はおの徳は只は指さ
りんよ思はおのすこかり

より船らるこ春れ山かと

馬柳のあさけのさあり白み晴て

行脚

秋かくぬもや花はささけ

梅くれ露める月は袖あとて

能阿

あきやく嵐あがすじまる雲

流るもの秋れ春ぬあう晴て

豊盛

かすらに掛る春れ山みら

朝やしらままもまれに花を尋はたせ 專順

いよへのうへ野の宮は銭さてえハ

老木はくあお山風をゆ 智蘆

おく程らすじ木されの道

らうらら銭さるよゆもハ花のか 同

こう呂にらさらり末れらる

身のあらとりり花の散とそ 心敬

春はいつていりまやらせ

と津うり朝乃屯銭らそにんく 專順

むめうささの記香れ下木

月よあけ若れ雪けさいさ

春れあけれ雪にゆく聲

ゆふくれの露の月ハ秋さきて

かうしすささく春のあけさ

あさあけさされてすめるも世の月

庭そ草木れ中にあれぬる

山科や花の古名らるもうし

まきつらさる浦とれ山風

しられ秋や夏初も花よ自あむ

能阿

宗砌

心敬

宗砌

同

とれ葉にさよりのとれ花さき

花うらひさあたられ明あめ

いとく戸初もに月残らるれ

人久ら山初あたらさ花の春

まこともすれは物さうあけさ

あさもあさ若初れ花残独えん

うさささ長たういあけ残のこすん

らかられささハ世とれま山風

春うらつともわぬ明あめ

月にちる花ハけよのりのあそ

行助

心敬

智彦

宗砌

心敬

物うさ門さほまれんさ

ももさよよ松風吹く花もあ

智益

花もたう春哉ふらそまゆらん

深生れあめのゆられの山

宗砌

いつはまよあひらとたりまじ

すもそめにそあしやうあれ衣久

専順

宵そ侍ふる祢のをれうこ

ほくさひなのささひくさよおて心敬

らす人あうたさくうらう人

さげしれ入野のこり清らねよ

宗砌

えてそ竹若うけよすまぬら

水あをさこ小田れさあ人あうと心

専順

信者いたくこり浦のあのもま

あつるれ濱のみく秋の月

同

人のいねらもあうさ灯

ありとみる程もあむい家あれや同

小船さう捨うらうらうそや

今船久らねらの里人移とす人く

宗砌

すくさ風乃秋とひく袖

夕立のなるれそよ月晴て

能阿

のりたうけよあき夜がす人

夏衣うすむれは海よりやうそ

心敬

年をへいひきんあきあうやきん

けぬう人あうあしれもる香

賢盛

まきこぬれは枯のまら風

あきもらう柳や鳥さきもらん

心敬

おるいげへをあきこいそき

枯と吹葉のうそ風はあう

同

あきれさううのおもももらん

は松のりこあきれこ枯風吹く

宗柳

芝生うれは枯草さうあ

夕暮れさうあ月も暗るそて

専順

こつ海をそい充みれ枯

あきれさううけり月をそ

徳阿

ねやの戸さむく通ふ松風

琴のおも月の色さふあは涼て

行助

あきすう心世あをさううん

うらひれ葉の枯乃あふれ

専順

昔たあうあう人のうらうひて

あき朝のあきれ夕れ

心敬

庭と枯野のまのむしと鳴

月とみやみと世は友は思ふむ

名もあはぬ小糸花さく川へ

芝せうらの枯れは水

むく月よ人をまきこ

夕霧のむさく葉は戸残さ

いゝあやうにたひささるむ

むさくや萱うす人吹枯れ

光のありれと月もえ

風つと捨系れ女の枯れ

宗砌

心敬

望盛

心敬

望盛

残りのう田の人もけを

ふもと月よ麻あく想は

こころと残るも遠さ

あまのこもさるも

志所れう人残るも

月とむさくらの境に

こころもけしが枯れ

里雲深れ夕もあ

厂も海もけも

正端れ月と

能行

智度

行助

尊順

宗砌

水のまろくや松子れ落

葛れんにむらぬうら唐あうて

智慮

まこと記ちうら岩の枯風

小麻あくおんれあくやまろくむ

專順

浅もあれのおく一本枯

滝津もれ落らうらよまあて

同

まやこさそかて思ふ山里

なうれあひの落るおねおねあうて心敬

そとりのふれ木葉ちうらこ長

しもれあ野之のあつ月さて

宗砌

まけく浅らうそとの追風

冬枯れ山がいつらあま小あ子

智慮

あを葉もみくぬ霧れ松うけ

山あれ月のお座よ鴨あて

宗砌

いこころられ中の下らら

あはまきこ月あう音あ今朝晴て心敬

みら後てさあふんれ陰海

音れえあう岩あむくま

專順

うしこといあんこもそんは

本れな浅あめじ音あはるあ

心敬

おのほとけいあれあきり

さしいこの法あさふれと約の雷 專順

いっせむうとこのひくさむ

くろ世のまは神系れ舞のそと 宗砌

あされあきぬ夕られもあき

あふるをりふふよたれるむむ 心敬

さうしていさぬそけいへあうけり

たつねやとあう高とやくすむむ 專順

神りあ人もさうくうらう陰

むにこそ整い人のうけりひて 行助

あとか事にあれらあきり

かけうハ夕れをけ整うもて 智彦

うらうこのとあひとふ仲

うらみとよ神あきあひのそこのめ 宗砌

うらまほともあれらけられ

明らあそれあきとよあきけき健て同

あめあきとさてもあきいせん

いのらげも人もあきぬさあきくに 心敬

なひくうあきもうつらひやむむ

たのやうよ世いさあきいハハハ 宗砌

あさ夕あつこ神の海つ

恋そらまら恋のちうや成あらじ 能阿

おのれこもそそにうゆり

かこもかくお恋れ月よむらねて 心敬

みもろあやまねあけみ

猿人あさほもさう袖ぬせく 宗砌

くらうこ物いこおあありきり

らうらすら胡夕おのつるてあま 専順

こ海もゆもいこやうこりや

物うもこほのやまこ海あうこて 同

おとと泪もやらあらむ

枕うらいなれ涙うを拵て 心敬

猿あしあつ人線まられよ

心海いさあ久り線そられ 宗砌

かこも字をおのひおそあさ

しつうに暮れらるるこ田舎 智彦

こもすもはれえのあも海

おゆのことたみうこにやあまそ 智彦

そらたももと成くこあまのこ

大海れ遠きこりひよあうこて 智彦

あきさら池の魚おぼけのらあ

汗の跡もれみの毛に風をく

うさハ日毎子備う歌を中

いつゆさそそ思ふとあれん吾野心

あつ海のうふ夕あそかり

あつ出くえんやこまぬ最の唐

はまらふ麻れそそ物けり

高砂や松の尾上乃風おらそ

備の後のまよの道なれや

うさ世もたらうきふれ心こ

宗砌

能阿

心敬

同

専順

いかり世あつちらん新末

うね身残もひるすそと備そ志り宗砌

あれハメらとおりおひ末

おと波の身残多と物と捨もそ同

人も孫是ハ明らむれりハ

老てこそあれもまれいらあかよ 智蘆

うさこいにくにさうく世中

あつ浪れうも老ハかうんく 心敬

向ハハ月おからそ露なり

老さうく結う世も成ぬらむ 能阿

たのめく未残月も志ろん

ふれむいとうと何うよの縁あり

うつもおかく美孔面親

身もいつ昔くうれ世くの友

あれう庭の林乃面け

あもうく海して清めん身のり来同

は床左あけて海やら空

いつさして我々の末の夕々あり

ちうらも憂こなるそ悲しき

あこあごにけ未あめび文残そ

行助

行助

専順

同

賢盛

心敬

道々のうあ料むられけ

古はくも昨日今ふられ流らひて

むえ八月そう海残もあう

西残のそねふ唐れ和すの枯

あれてらなれんんもをん

なふ事うむつあうん六の道

ふうけあうら暖織のあう是

人うらゆあへれ寺にう子ありて

らうもよ海まあうこれ神垣

まうひてや我世残あう新らうむ

専順

宗砌

同

同

同

才成をうつ心ちやすくあさりの成

家成おりのいさむまの物 心敬

え成おるまぬもたう人乃あめ

必あくるならいひくされカもし 専順

いかにひいてう人成るいん

えあぬれうる國成おさむの謀 同

おに任くゆり六十餘句いつおれ志の切あうとか

ま集ゆれいま内秀逸一真漢胡のちり和國の由統

未あひやういけは百句い只これとまのりて學志れ

連新そんすまのまを撰ゆりし但け内よすくことう

こけい神心れ耳に遠きもあう又詞心法うくくそ

學の目よ成よりぬもゆりく大略ハ長高有心幽玄小

んあうく詞えんあうてとあうくく入かにいあう

成あうめゆりし法け作者れ句に付中心詞殊く

くハゆりあうくくあたるぬとくくくえゆり教

履し

ううくく文お又そむいんる

あういせに學もぬ道ハくひもあう 心敬

袖よあやうや家音解何

せう入ておこは滋も代をたるま 智益

祢ね時りれや曉の秋

まろそふげと花いよとさるれ秋 宗砌

おのひやらにもうらゝの後の世

おろろあろ親よあまのまゝさるめや 專順

むらひおそろうくつらうく

老ぬれハ親はおのゝぬ身は遠く 心敬

さうひしくあろぬふけれ痛

うこそがよすそ心やあらうん 同

ひらうあまひと年れら道

こころいさめら老はらうあ 同

さうむらとも人よこせられ

しらハ花と初み付けもそく 同

まろこちろちろよせはやおそん

花さるぬ若本れまに身ハ老て 宗砌

あれ草のまろこちろあ

籠よこは花れ整はらうくて 宗砌

露うらそく庭乃草し

花のほろまふ者こ荒くそ 行助

あく火くめれハ月そ文り

さうくは秋の祢ねはうこあま 宗砌

あゝぬゝぬ我もたのむる
月も程つらあつらあむらじ
同

ちかしくこそ此里のうら
み

我もほく月を影のうらみ
行助

我も人ごとくは
心敬

志はらへよ涙も袖に
心敬

あられもけし人そつ
心敬

けせあゝあゝこい
同

こころとせめて
同

うらめしく
同

あやうううう
同

列れよよの誰か
望盛

あゝあゝあゝあゝ
同

我やりのこの玉
宗徳

名もくらら
同

志のすむ文を
心敬

け舟の葉よらおの
同

とらうらやうに
同

さすうらやうに
同

よら舟の白濁
同

事にこそあやうにありしこと句はりしことめとして
 見えあすりたるひゆるく一太武高遠の神の雲の雲
 ことあやうくもすそにの雲れ志あにけみそを
 もて心ゆるくもすそにの神合判よえたよを
 てあやうくもすそにの神合判よえたよを
 うらふあありこれよてもあやうくもすそにの
 も判者後成つしむ作へことしこそ練新一辨よ
 色晴の神としていふ山橋よことあやうくもすそに
 をい信のあやうくもすそにのあやうくもすそに
 孫よあやうくもすそにのあやうくもすそに

と神のあやうくもすそにのあやうくもすそに
 古今集れ申よたよゆるくもすそにのあやうくもすそに
 あやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 られあやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 一首あやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 ことあやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 其のあやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 ゆるくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 ねのあやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに
 ことあやうくもすそにのあやうくもすそにのあやうくもすそに

りし志もれもあふひく事なれは一度のやりに
 去るよへし地盤にんくく詞をんあふんこひ
 孫のく時よあふくあふんい我れやつれ
 よいあふゆくあふくゆくよもあひたてひ
 うとする事ゆかき心下ふにばよふとやさゆれ
 時いふも後悔の心はもつこあふむむにそ
 うろとれれとつゆゆゆよこれららの作志の心
 ハ峰馬の鞭をうかどまを馳馬にのんと思ふあり
 うらあひあふ心とんばよハさるあふらつれと出来
 て邪路よゆりて行まに正道の句は待すたふひ

ゆかし詮とするふのみら心さくしてよふけあに実
 地をあはしてささりて登まを枕言古す人さああり
 定家古今れおく書お但めは用捨の随某月れ
 不存あふな自作差別志同志可随く云く甚志何
 月とく人もけ一帳といはあ書あふんる也

千時文明第十一曆己亥春三月書之

宗祇



打田右衛門尉殿

群書類從卷第三百五

卷三百五

五十九了

